

「ネパール交換研修オンライン勉強会」に看護学科の学生が参加しました！

本学国際交流センターが企画した、ネパールのハチガンダ福祉協会の学生さんとのオンライン勉強会が3月10日に開催されました。

日本側のコーディネーターは看護学科の黒野准教授、参加学生は11名、そのうち8名は看護学科の学生と卒業生でした。

学生たちは、「What Was Obtained During The COVID-19」「Widening Disparities During The “COVID-19 Crisis”」「Cherish the Bonds among the People」「COVID-19 Infection Control In Critical Care Areas」などについて英語で発表したり意見を交換したりして、お互いの国の状況を理解し合いました。

看護学科4年生の海金さんは、勉強会後に『COVID-19を恐れる以前に、空気の汚染を気にしていない人間がいる、汚染していても当たり前の生活が当たり前であることは恐ろしい』ということを学んだと話していました。



以下に、2名の学生の感想を紹介します。

看護学科3年生 藤本さん

2年前にネパールを訪れていたもので、パソコンの画面に映るネパールの景色や人が懐かしくて、とても嬉しく、早くみんなに会いたくなりました。

ネパールでは新型コロナウイルスの罹患者のうち、98.5%の人が回復していること、手洗いやマスクなど対策を行っていること、対策により呼吸器疾患や結核などの罹患者数も減少し、全体の死亡数も低下したと学ぶことができました。

私がネパールを訪れたときは葉の色が緑ではなく灰色でしたが、完全なロックダウンにより工場や車の排気ガスが激減し空気も綺麗になったのではないかと、現状を想像することができました。

コロナによりマイナスな面が捉えられやすい中で、コロナ対策によるメリットについても考えることができ、とても素敵な時間を過ごすことができました。

看護学科3年生 澤田さん

コロナ禍で大変な思いの方が多いですが、私たちは逆に良かった出来事について発表しました。オンライン機能が普及したことで、離れた場所に住む旧友と話す機会が出来たことや、前から交流があった韓国の友人とは、直接会えなくてもメッセージのやり取りを行い実習中に励ましてもらった事などを発表し、この情勢をマイナスに捉えるだけでなく、プラスの面も捉えました。

交流会に参加してみて、世界中の人々が経験しているものを国別、さらに個別の視点で捉えた発表を聞くことができたので、コロナの影響を多面的に捉えることができました。はじめは、全部英語で発表することや、実習期間中に発表準備を進めることに不安や大変さもありましたが、終わってみると「参加して良かった！」という満足感でいっぱいでした。

国際交流はハードルが高く感じるかもしれませんが、チャレンジして得られる物も多く、何より自分の経験値になるため、是非もっと多くの人に参加してもらいたいです！



2023